

「再構築と視覚化」展 転換期2000年代～

世界がミレニアム・ムードに沸くなか、国内では伊藤若冲らの江戸絵画が衆目を集めるなど若い世代を中心に日本文化を再発見する風潮が見られました。根付界でも古典根付の実用美や妖怪などの題材を再評価する機運が起こりました。ネットの普及とともに展覧会や美術雑誌などで根付を初めて知った人が、作家を目指すようになり、美術家やデザイナー、イラストレーターなど多様な背景を持つ根付作家が登場しました。根付を一つの媒体と捉え、現実の枠に取まらない主観的世界や独自の物語性を再構築した作品が発表され、新たなステージを迎えました。2007年に京都 清宗根付館が開館し常設展示となったことで、より視覚的拡張性と作品の完成度が問われるようになると作風にも大きな変化をもたらし、アートやサブカルチャー、日本芸能など様々なジャンルを密接に結びつけながら、日本文化を表象する根付が発表されるようになりました。



及川 空観 (1968～) 「桃太郎」高4.2cm・象牙  
 宝石会社の広告デザイナーと並行して根付の創作を始めたのは1997年。根付を構成する造形要素を分解し、再構築する視点に立った創作を行っている。パロディ彫刻からの影響を受け、多正面を活かしたダイナミックな造形効果と物語の高揚感の表現を組み合わせ、劇場的な演出をする特徴を持つ。

向田 陽佳 (1968～) 「二重奏」高3.3cm・黄楊  
 化粧品会社の広告デザイナーであった陽佳は1998年から根付制作に転向。シュルレアリスム的な思考実験であるディペイズマン(意外な組み合わせ)と対象の擬人化に特徴を持つ。器物であっても形体を歪ませることなどで新たな意味を付加し、感情表現と結び付けている。書道家でもある

加賀美 光訓 (1959～) 「ブラックホール」高5.2cm・鹿角  
 工業モデルの試作制作をしていた光訓は2011年から根付の制作に携わる。「ものづくりの精神」を大切にしたい姿勢は、異素材の嵌入や仕上げの磨きにもあらわれている。また球体を応用したキャラクターデザインは、少年漫画のような親近感を与える。コミカルなキャラクター設定と因果律の物語性を持ち、コメディの一幕を観るような娯楽性に特徴がある。

和地 一風 (1970～) 「化け福」高4.1cm・象牙  
 会社員を経てから1996年から根付制作を開始。妖怪や鬼、蟲(むし)などの幻想的で怪しい異形の者たちや小さな生き物に惹かれる一方で、異世界への存在に触れた時の人の心の揺らぎや人間の奥底に潜む本質に迫ろうとしている。不条理や不可思議な世界との関係性をテーマにしている。また素材の魅力を引き出すことを大切にしている。

山本 伊多呂 (1961～) 「家守童子」高4.4cm・黄楊  
 細密木口木版画で経験を積み、アートの現場から根付の創作を始めたのは2000年。伊多呂の作品には日本的なモチーフに見られる「場所の記憶」やレトロスペクティブ(懐古的)なテーマから窺える「時間の超越」がある。その時空を横断しながらも存在する「私」を表現しようとしている。内面世界の表出により唯一無二な個性を拡張している。

2023年 7月～9月の特別企画展のご案内  
**未知なる世界への挑戦**  
 7月「熱闘根付館」展 ■ 7月1日(土)～30日(日)  
 8月「異世界の住人たち」展 ■ 8月1日(火)～31日(木)  
 9月「旅への浪漫」展 ■ 9月1日(金)～30日(土)

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter、Instagramにて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞(奈良県大和郡山市より授与)  
 家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演



佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。



栗田 元正 (1976～) 「三酸」高3.6cm・象牙  
 剥製師の父と牙角を扱う家業の影響で幼少より根付に親しんできた元正が根付の制作を始めたのが1998年。初期は鳥を中心とした題材を好んでいたが、清宗根付館が2007年に開館したころから、歌舞伎などの人物像に挑戦し2010年ごろから「小唄」を皮切りに日本文化の研究をして主題の幅を広げた。新古典主義を唱え、擬古的な作風を展開し根付の王道を目指す。

森 哲郎 (1960～) 「蝦蟇仙人」高4.9cm・黄楊  
 東京藝術大学で油画を専攻していた哲郎と根付の出会いは1994年放映のテレビ番組「極める 日本の美と心」に遡り、同年から根付制作を開始。当代随一の蒐集家が所蔵する古典作品から研究を重ねた。良い作品には普遍の美があると唱え、在来の題材を翻案



及川 空観 (1968～) 「桃太郎」高4.2cm・象牙  
 宝石会社の広告デザイナーと並行して根付の創作を始めたのは1997年。根付を構成する造形要素を分解し、再構築する視点に立った創作を行っている。パロディ彫刻からの影響を受け、多正面を活かしたダイナミックな造形効果と物語の高揚感の表現を組み合わせ、劇場的な演出をする特徴を持つ。

向田 陽佳 (1968～) 「二重奏」高3.3cm・黄楊  
 化粧品会社の広告デザイナーであった陽佳は1998年から根付制作に転向。シュルレアリスム的な思考実験であるディペイズマン(意外な組み合わせ)と対象の擬人化に特徴を持つ。器物であっても形体を歪ませることなどで新たな意味を付加し、感情表現と結び付けている。書道家でもある

加賀美 光訓 (1959～) 「ブラックホール」高5.2cm・鹿角  
 工業モデルの試作制作をしていた光訓は2011年から根付の制作に携わる。「ものづくりの精神」を大切にしたい姿勢は、異素材の嵌入や仕上げの磨きにもあらわれている。また球体を応用したキャラクターデザインは、少年漫画のような親近感を与える。コミカルなキャラクター設定と因果律の物語性を持ち、コメディの一幕を観るような娯楽性に特徴がある。

和地 一風 (1970～) 「化け福」高4.1cm・象牙  
 会社員を経てから1996年から根付制作を開始。妖怪や鬼、蟲(むし)などの幻想的で怪しい異形の者たちや小さな生き物に惹かれる一方で、異世界への存在に触れた時の人の心の揺らぎや人間の奥底に潜む本質に迫ろうとしている。不条理や不可思議な世界との関係性をテーマにしている。また素材の魅力を引き出すことを大切にしている。

山本 伊多呂 (1961～) 「家守童子」高4.4cm・黄楊  
 細密木口木版画で経験を積み、アートの現場から根付の創作を始めたのは2000年。伊多呂の作品には日本的なモチーフに見られる「場所の記憶」やレトロスペクティブ(懐古的)なテーマから窺える「時間の超越」がある。その時空を横断しながらも存在する「私」を表現しようとしている。内面世界の表出により唯一無二な個性を拡張している。

公益財団法人 京都 清宗根付館とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね(宗)とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。



SPRING ~ SUMMER Issue. 12  
 [目次]  
 ■ 企画展の見所  
 ■ 根付研究 最前線

[発行元]  
 公益財団法人 京都 清宗根付館  
 〒604-8811 京都市中京区壬生 賀陽御所町46番地(壬生寺東側)  
 電話 075(802)7000  
 www.netsukekan.jp/

日本橋 文化庁 京都へ

日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内  
**飽くなき挑戦と受け継ぐ熱意『現代根付の軌跡』展**

根付はその発生から約400年の歴史がありますが、1970年頃から従来の表現を脱して、現代的な感覚を取り入れた創作運動が起こりました。分業が主流だった工房制作から作家一作主義へ移行するなかで、作家らは研鑽を重ね意欲的な作品を発表し「現代根付」と呼ばれるようになっていきました。さらには新しい工芸技術や素材が駆使されて新局面を迎えています。昭和、平成、令和へと変遷するなかで作家たちは前時代の克服を目指し、常に「今」を表現しようと模索を続け、同時代を生きる私たちの共感を誘ってきました。本展では世界の潮流や社会現象などとの関係性も紐解きながら、現代根付の約50年の歩みを概観いたします。4月は「継承と革新」展と題して1945～1970年代までを

振り返り、現代根付の夜明けとなる戦後の象牙ブームから、高度成長期を背景に次第に高まる若手作家の意識の芽生えと現代根付の誕生までをたどります。5月は「遊び心と表現」展として、80年～90年代を中心にグローバル化が進むなか、外国人作家や宝飾、漆芸作家らが参入し、個性的な表現や根付の新しい解釈が生まれ、表現の多彩さが押し広げた現代根付の可能性を見ていきます。6月は「転換と再構築」展と題して、2000年以降に登場した美術家などの専門的なバックグラウンドを持つ作家たちが、根付の自立性を再構築し、その価値を問い直し始めました。物語性を内包する独自の世界観を押し出すなど転換期を迎えた現代根付の新しい挑戦を紹介し

日本橋 文化庁 京都へ

飽くなき挑戦と受け継ぐ熱意

NETSUKE CHRONICLES 1973-2023

BACK TO THE BEGINNING OF CONTEMPORARY NETSUKE

**現代根付の軌跡展**

「継承と革新」展 Special Exhibition in April \*Inheritance and Innovation\* 4月1日(土)～30日(日) April 1(Sat) to 30(Sun)

「遊び心と表現」展 Special Exhibition in May \*Playfulness and Expression\* 5月2日(火)～31日(水) May 2(Tue) to 31(Wed)

「再構築と視覚化」展 Special Exhibition in June \*Reconstruction and Visualization\* 6月1日(木)～30日(金) June 1(Thu) to 30(Fri)

4月 戦後工房制と日本趣味 vs. ネツケ・モダニズムと作家意識の浮揚  
 ■ 4月1日(土)～30日(日)

「継承と革新」展 草創期1970年代～

1970年代現代根付が誕生する以前の根付の流れを見ると、幕末期に隆盛を極めた後、明治期には欧米への輸出に見出したものの、次第に不遇の時代に入り、戦前はわずかな名工によってその命脈が保たれました。戦後になると米国人らの旺盛な需要で一変し、再び好況を博しました。当時の題材は外国人の嗜好に合わせて、歌舞伎や能、十二支、七福神などの日本趣味を前面に出した立像が多く、細密な装飾と着色の妙に特徴がありました。高度成長を背景に消費社会が訪れ、また彫刻界の世界的潮流におされ、1960年代半ばから根付作家の意識にも変化があらわれます。70年初頭の外国人蒐集家との出会いが転換期となり、従来の工房制職人から脱却して、作家一作主義を掲げる現代根付運動が始まりました。現代的な感性を大切に、装飾を抑えた簡潔な造形はネツケ・モダニズムともいべき清新な印象をもたらしました。



稲田 一郎 (1891～1977) 「猿廻し」高3.9cm・象牙  
 日本画家の経験を持つ一郎による岩絵の具を使った作品。手に馴染みやすい根付らしい丸みと量塊を持たせ、頭部を大きくしたプロポーション(ペビースキーマ)で親しみやすさと愛らしさを感じさせる。ほのぼのとした情景で人気を博した。1925年から根付制作を開始。

平賀 胤壽 (1947～) 「抱擁」高4.0cm・象牙・マホガニー  
 明治期に写実的な「人体骨格置物」で名声を博した、旭玉山の系統を継ぐ胤壽。骸骨は不気味に捉えられがちだが、江戸時代は魔除けや、死を恐れぬ武士の覚悟の象徴であった。胤壽はそこに一編の詩情を盛り込み、鳥の抱擁に照れているような人間味を盛り込んだ。1973年から根付制作を開始。

中村 雅俊 (1915～2001) 「草摺引(曾我五郎)」高5.4cm・象牙  
 極限まで彫り込められた刀さばきに驚かされる戦後の傑作のひとつ。歌舞伎役者の端正な容姿は写実的で、実際にそこで演じているような臨場感が漂う。象牙彫刻の家系ならではの堅実な伝統美を伝える。1939年から根付制作を開始。



岸 一舟 (1917～) 「加茂」高5.5cm・象牙  
 戦前戦後を代表する一舟の作品。超絶技巧に裏付けられた繊細な装飾と細微な着色を施して、まさに日本の美を体現したような立像の根付。深い精神性を湛えた能舞台の一瞬を彫り上げている。1958年から根付制作を開始。

立原 寛玉 (1944～) 「いななき」高6.8cm・マホガニー  
 動物牙彫職人の家系を持つ寛玉は、解剖学を会得して骨格や筋肉を基にした造形と根付にした際のデフォルメの秀逸さを特徴とする。1966年から根付制作を開始。根付が小置物でないことを掲げ、根付らしいフォルムを追求する。内面から漲るエネルギーが動物たちに躍動感を与える。



齋藤 美洲 (1943～) 「着水」高4.3cm・象牙  
 幕末から続く象牙彫刻の家柄で、幼少から古典根付に慣れ親しみ、同時に西洋彫刻にも関心を抱いてきた美洲が根付制作を開始したのは1961年。装飾を省き、塊に大きな穴を空けるといった大胆な造形美によって現代根付の方向性を決定づけた。

小林 仙歩 (1954～1994) 「落ちた蟬」高5.1cm・象牙  
 象牙置物を制作していた仙歩は1954年から根付の制作を始める。聴覚に難を持ち、生涯にわたって声や音に題材を取りながら内省的な思索を深める作品を発表した。形而上学的な命題をよって、根付が単なる愛玩物でない深い精神性を示唆できることを試みた。

5月 80年代:造形主義 vs. 90年代:工芸技術導入と遊び心  
 ■ 5月2日(火)～31日(水)

「遊び心と表現」展 拡大期1980年代～

牙彫の家業を継ぐ作家を中心に研究会が立ち上げられ研鑽が積み、80年代には豊かな量感と動勢を活かす造形力が高まりました。作家主導の展示会も始まり、メディアでも紹介されて国内外で美術品のとして評価が進みました。85年には円高の急進、また89年象牙の国際取引禁止、91年バブル崩壊によるあおりを受けましたが、90年代には宝飾や漆芸、ガラス工芸、外国からの作家らによって工芸技術を駆使したミニチュア的再現性の高い作品が発表され新風が吹き込まれました。さらに時流も「軽薄短小」へシフトするなか、言葉の連想や洒落などの情報価値も重要な要素として根付にも活かされ、大衆性や娯楽性の側面を補強しました。94年には大英博物館での現代根付展が開催され盛り上がりを見せました。根付は新しい表現分野として国内の美術・博物館で大型展覧会が組まれ、今まで根付を知らなかった層までも目にする機会が増えていきました。



佐田 澄 (1944～) 「立夏」高3.1cm・象牙  
 根付の題材で人物は多いが裸婦像は珍しいが、澄は着色しない白仕上げを特色とした芸術性の高い新たなジャンルを切り拓いた。1978年から根付制作を開始。優美な顔貌、伸び伸びとした肢体が清らかな印象を与える。立夏(5月上旬ごろ)の清涼な季節感を擬人化している。

高木 喜峰 (1957～) 「時の船」高4.1cm・オウム貝・金  
 宝石の金属加工の職人をしてきた喜峰は幅広い種類の素材を自由に組み合わせ、象嵌を得意とする。さらに言葉を題材にした頓智や洒落を作品に盛り込み新しいスタイルを確立。根付が造形的強度から記号的解釈をあらわす転機となった。1992年から根付制作を開始。

黒岩 明 (1949～) 「太陽系四次元」高3.7cm・樹脂・銀  
 ジュエリーデザイナーとして活動していた明は、1992年から根付制作を開始。従来の工房制や徒弟制度とは関係ない自由な立場から、根付彫刻に金属加工とともに漆芸を積極的に取り入れている。新素材にも挑み、装飾性を重要視した表現を根付界に持ち込んだ。



駒田 柳之 (1934～) 「伊勢物語」高4.9cm・象牙  
 牙彫置物を手掛ける家系に生まれた柳之は、当初置物を彫刻したが、1964年から根付を手掛けた。根付では若い女性を意匠にまとめる難しさがあつたため、独自のポーズに挑戦し、美人根付の先駆けとなった。顔の傾きから心情が読み取れるような優雅な作風に特色がある。

若林 寛水 (1955～) 「おたけび」高5.6cm・象牙  
 怪奇な生き物や人面の動物彫刻を得意としたグロテスクな作風で知られる寛水は、眼に見えない幻想的な世界を写実的に彫り上げる。球体を意識した根付らしい意匠が秀逸で、切れ味の鋭い刃痕と丁寧な磨きと仕上げを特徴にしている。1984年から根付制作を開始。



糟谷 一空 (1949～) 「擁」高3.6cm・象牙  
 一空は洗練されたデザイン感覚と高度な彫刻技術が持ち味で、根付とアートの境界を超えようという気概をもって根付界に新風を吹き込んだ。1979年から根付制作を開始。94年にはテレビ番組「極める」に出演して、後進へ影響を与えた。

針谷 祐之 (1944～) 「ヘビースモーカー」高3.5cm・象牙  
 山中漆器(蒔絵)の茶道具制作からキャリアを始めた祐之は1993年から漆を使用して、ウィットに富んだ発想の根付の制作を始めた。当初は蒔絵や螺鈿などの絵画的要素が中心だったが、木彫りや芝山象嵌など幅広い技術を融合させて独自の立体漆芸様式を築く。

根付研究 最前線  
 『根付界のフェノロサ』

公益財団法人 京都 清宗根付館  
 学芸員 大西 弘祐 (忠雲)

近代国家日本が推し進めた欧化政策によって、破滅的な打撃を受けたのが、伝統的な美術品でした。それまでの旧幕藩体制は消滅し、困窮した武家は伝来の家宝を放出、また世禄を離れた絵師なども職を失って名宝や摸本を手放し、さらに、「廃仏毀釈」のあおりを受けて仏頭や仏画等は打ち捨てられ、寺宝等も巷間に流

出しました。こうした逼塞状態にあった日本の伝統美術を救い、復興に尽力したのが、お雇い外国人として来朝していた哲学者アーネスト・F・フェノロサ (1853～1908) でした。フェノロサの心を日本美術復興へと突き動かしたのは、文字通り、日本美の発見にありました。フェノロサは、奈良時代の仏教彫刻のなかに、西欧の古典的伝統としてあるギリシャ・ローマの美の理想の連なりを発見し、これが機縁となって、講演を通じて、東西の芸術が帰する理想について語り、日本美の自覚を日本人に促しました。こうして醸成されていった日本美術復興の機運は、一つに職人らに自信と誇りを取り戻させたのです。つまり、フェノロサは職人らのハートに火を付けました。このように日本美術復興をめぐるフェノロサに想いを馳せる時、根付復興をめぐる一人の恩人を賞せずにはい

られません。去る半世紀前、現代根付と冠して、これまでに囚われない新しい根付制作を熱望した作家らに、現代の感覚による根付の創作を奨励し、彼らの心に火をつけたのが、大実業家でありキンゼイ国際芸術財団の創始者であるロバート・O・キンゼイ氏でした。フェノロサは「鑑画会」を起こし、若い世代による日本画の新様式の創造を目指しましたが、キンゼイ氏もまた、フェノロサと同様の使命感と美学によって、現代根付を擁護しました。畢竟、この活動がなければ、現代根付は今とは異なった道を歩んでいたと言っても過言ではありません。

\* MIRIAM KINSEY [Contemporary Netsuke] CHARLES E. TUTTLE COMPANY 1977  
 \* 小考は神林恒道先生の論に立脚しています。また、フェノロサの理解には山口静一先生ならびに村形明子先生の論考を載せています。



木下館長(写真左)とロバート・O・キンゼイ氏(写真右)/アメリカ ロサンゼルスにて